
眠りの魔女

ランデブー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠りの魔女

【Zコード】

Z0418B

【作者名】
ランデブー

【あらすじ】

眠りの魔女リドリーは、人々に幸せな眠りを与える事がお仕事です。

(前書き)

この作品は「十円の童話」です。今回のテーマは“眠り”です。

丘の上に建つ洋風の建物は、“眠りの魔女”的お住まいです。

彼女は町の人達ととても仲が良いけど、極度の内気で極度の人見知りの為、町から少し離れた“ヒトリー・ボッチの丘”にお城を建ててしまったのです。

勿論魔法であつて、その際、MPは何百万と使つたそうです。

そんな魔女のお仕事は、人々に幸せな眠りを与える事。月が二つと笑つたら、眠りの魔女は家来のフランス人形と共にバルコニーへと足を運びます。

バルコニーに着くと眠りの魔女は手摺りに片手を置いて、街灯の光が綺麗な町を一望します。

そして、黒のマントを家来のフランス人形から手渡され、身に纏つて深呼吸をします。

綺麗な夜景に見惚れている眠りの魔女。その顔付は、何だか淋しそう……。

「いつも思い出しますよね、ローン様の事を」
フランス人形が言いました。

「……彼の事は今でも好きなの。だから、彼の事を思うと胸が熱くなる」

胸を優しく押さえる魔女は、涙を流していました。涙は頬を過ぎ、顎を過ぎ、石畳のバルコニーへとゆっくり落ちます。

眠りの魔女は涙顔のまま、億千の星が綺麗な夜空の中で、一際光り輝いている月を見ます。

月は、一コリと笑っていました。

（眠りの魔女リドリー。

涙を拭いて、元気を出しなさい。貴方は世界中の人々に幸せな眠りを『えなくてはいけません）

空から女性の声が聞こえました。

（幸せな眠りを“悪夢”に変えてしまつ不屈き者から人々を護るのが、貴方の役目なのです。クヨクヨしている時間はありませんよ。私が笑つたのですから）

その声はとても美しいモノでした。

「そうですね。過去を振り替えつて涙を流すなんて、虚しいだけですね、惨めですよね……」

リドリーは涙を堪え、強がつています。ホントは辛いのに我慢しているのです。

（過去の過ちを虚しい、惨めと思つるのは人それぞれです。しかし、何時までもその事を引き摺つていては一歩も前には進みません。この事を、肝に銘じなさい）

光り輝く月の下、頭を下げるリドリー。

流星群は彼女の気持ちなんて知りもしないで、呑気に発光しています。

「……」

静かに顔を上げる。

「リドリー。時間があまりないよ」

幾つもの宝石があちこちに付いている杖を、リドリーに渡すフランス人形。

「今日も幸せな眠りを。楽しい夢の世界をお楽しみ下さい——」
フランス人形から杖を受け取ると、リドリーは杖を空に向けました。

そして咳きました。

「さあ皆様眠りましょう」

すると、杖のあちこちに付いている宝石からキラキラした粉がで
てきました。ソレは、北風に流され、南風に流され、世界中へ流
れていきます。

“眠りの粉”を吸った人間は、突然眠たくなる。眠りの粉は、眠
る事を忘れていた人・不眠症の人を助けた
「私達には、何故か効き目がないですね」

数分が経ち、世界中に眠りの粉は流れた。

“眠りの双眼鏡”でちゃんと寝ているのか確認をする。それと同

時に、悪夢を見ている人を探す。

幸せな夢を見ている人は“白い煙”、悪夢を見ている人は“黒い煙”が、鼻から出ている。

「悪夢を見ている悪者、貴方は一体誰なんだろう。人々を恐がらせて何が楽しいの……？」

微風が肌を擦る。

「貴方を見ていると、昔の私を思い出す。悪知恵しか頭がはたらくなくて、気付けばエスカレートして、自分では止められなかつた……」

月光が辺りを照らす。

「だから私は、貴方の悪戯を止める」

カラスの泣き声が聞こえた。

「リドリー！ 黒い煙を見つけたよ。早く悪夢から皆を助けないと」「分かっているわ」

夜空に輝くお月様が大きく口を開けて笑った時、遠くの方から音が聞こえてきました。

パカパカパカパカーー音は徐々に大きくなります。

「あの揺れが心地よい」

「酔いませんか？」

バルコニーの前に、一台の馬車が止まりました。

何もない空間に浮いています。

運転手はおらず、一頭の馬がいるだけです。

「地球の反対側まで頼みます。鳥の群れに気を付けてくださいね」リドリーはそう言つた。

(安全運転でお客様を目的地まで連れていきます)

馬車の方から声が聞こえた。

リドリーは振り返り、フランス人形に一言。
「行つてきます」

フランス人形は馬車が見えなくなると、バルコニーを後にした。

空飛ぶ馬車”は走りだした。パカパカという足音を夜空へ響かせて——。

目的地に着いた。

街中から黒い煙がでている。

「皆恐い夢を見せられて、唸つてゐる……。早く私が皆を助けないと」

リドリーは杖をギュッと握り、空中に浮きました。そして、杖を空に向けます。

街中から、黒い煙が消えました。

馬車に乗っているリドリーは景色を見ていました。

(どうしたんだい？元気がないじゃないか)

突然声が聞こえました。回りに人はいなくて、いるのは馬だけです。

「黒い煙があんなに出てたのに、悪夢を見せてる悪者が現われなかつたからさ」

(きつとりドリーさんの事が恐くて逃げたんですよ)

「それだと嫌だな」

(怪我がなくて良かつたです)

空飛ぶ馬車が止まり城に着いた。

リドリーは、欠伸をしているから眠そうだ。

「あれ、フランス人形は？いつも戦から帰つてきたら、チーズケーキを持ってくれるのに」

(洗濯とか掃除をしてるんじゃないですか？早く報酬の人参を食べたいのですが……)

バルコニーは静まり返っていた。そして、城はいつも夜になるとライトアップされているのに、今は真っ暗だ。

「何で真っ暗なのよ！観光客が減るじゃない。そうなると、貴方の報酬である人参が買えなくなっちゃう」

(それは困る。悲しくなるよ。僕が報酬の人参を貰えないかもしないのに、月はいつものようにニコリと笑ってるしさ)

そう言って夜空に光り輝くお月様を見た。

しかし——。

「お月様泣いてるよ……」

星がキラキラと輝く夜空の下、人々が幸せな夢を見ていました。
眠りの魔女リドリーが、幸せな眠りを与え、幸せな夢の世界へ招待してくれるのでした。

しかし、中庭で頭・体・手足がバラバラになつたフランス人形だけは、永遠の眠りです。

（後書き）

最後まで読んで頂き有難うござりますm(――)m 今回も懶怠足の
ような感じがします。そして説明不足かもしません。このような
事になるのは僕の力不足です。今後の小説の為、よければご感想・
アドバイスをよろしくお願ひ致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0418b/>

眠りの魔女

2010年10月28日05時27分発行